七日七日のおつとめ

中陰法話

法名

平成　　年　　月　　日寂

俗名　　歳

初七日 しょなぬか	月	日
二七日 ふたなぬか	月	日
三七日 みなぬか	月	日
四七日 よなぬか	月	日
月忌（がっき） ※土地によってつとめるところとつとめないところがあります	月	日
五七日 いつなぬか	月	日
六七日 むなぬか	月	日
七七日 しじゅうくにち	月	日
百カ日 ひゃっかにち	月	日

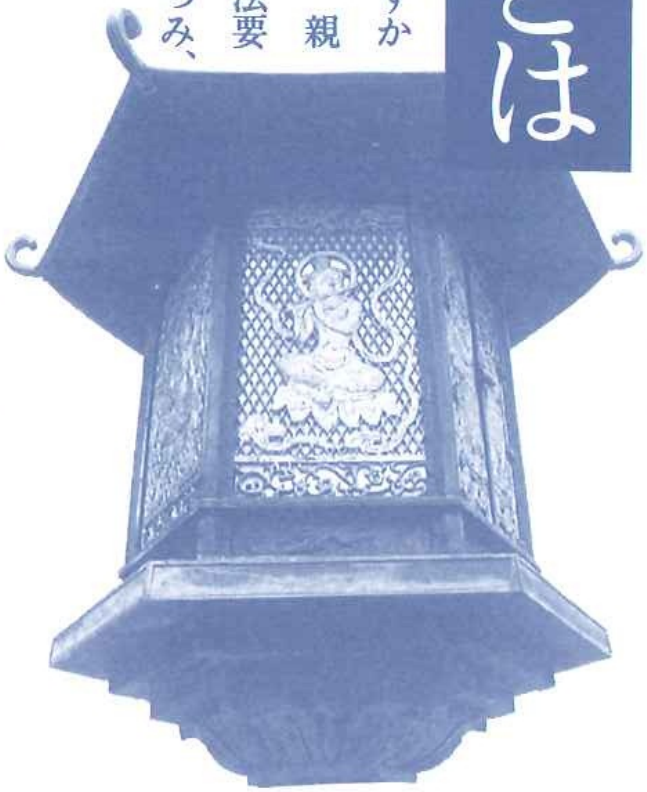
初七日

しょなぬか

「中陰」とは「中有」ともいわれます。人がこの世の生を終えてから、次の世に生をうけるまでの存在であるといわれ、その期間は四十九日であるという古来からの説がもととなっています。輪廻転生ということばがあります。人は生まれかわり死にかわりして六道――地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上――をめぐるという思想です。

中陰は、この六道のいずれにも定まらない状態のことで、閻魔大王のもとで七日ごとに裁判をうけ、四十九日には死者の先ささきが定まるというのです。ですから悪道におちぬよう、親族縁者があつまって法要を営み、善根功徳をつみ、その果報を亡き人にさしむけようとするのです。これが、他宗（浄土真宗以外）の中陰法要です。

中陰とは



しかし浄土真宗の七日七日のおつとめは、右のような意図のもとに行われるものではありません。浄土真宗の門信徒は、ご本尊の阿弥陀如来によって間違いなくお浄土に救われるのです。したがって、七日七日のおつとめは、亡き人を偲びつつ、亡き人をお救いくださる阿弥陀さまのお徳をたたえる法会（仏法のあつまり）です。

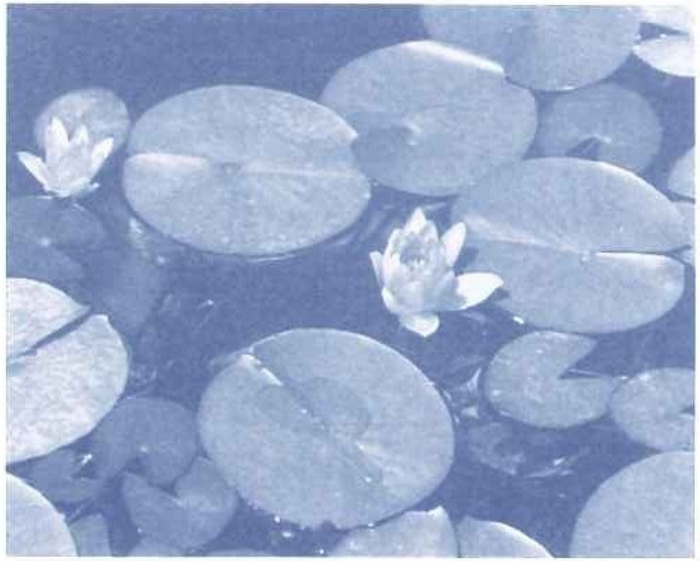
二七日

ふたなぬか

地獄極楽

「地獄極楽」といえば、源信和尚（平安中期の高僧＝浄土真宗の七高僧のお一人）があらわされた『往生要集』です。この書物が世に出ることで、地獄のおそろしいありさまを描いた地獄変相図や、多くの菩薩をともなった阿弥陀如来の来迎図がさかんに描かれるようになり、わが国の浄土教美術に大きな影響をあたえました。この『往生要集』には、地獄のむごたらしい様相が、ことこまかに述べられています。

まず、地獄は大別して熱地獄と寒地獄の二つがあります。なかでも凄惨なのが熱地獄です。



等活・黒縄・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・阿鼻地獄の八つの熱地獄です。また、これらの地獄は有限の世界で、いつかは脱することができるとされていますが、気の遠くなるほどの長期間にわたり、言語を絶する苦しみを受けると説かれます。死ぬほどの苦しみののち、すぐ生きかえって再びおなじ苦を受ける――このくりかえしが地獄です。そして私たち凡夫はみんな、この地獄行きの資格をもち合わせているのです。その私たちをお浄土に救いとるために仏となられた阿弥陀如来の、お徳の大きさがあらためて偲ばれます。

三七日

みなぬか

浄土真宗のご本尊は、阿弥陀如来です。地獄行きしかないこの私を、お念仏ひとつでお浄土にお救いくださる、たのもしい仏さまです。

私たちは一般に、阿弥陀さまといいますと、お仏壇に安置された絵像や、お寺の本堂におられる木仏を頭にうかべます。どちらも、お立ちになっておられるのが特徴です。それは、迷いの中にある私を救いとろうとされているお姿でもあります。また、「南無阿弥陀仏」の六字の名号も、ご本尊として礼拝しています。

阿弥陀如来

阿弥陀如来は、法蔵菩薩であったとき、すべての人びとを平等に救うため四十八の誓い（四十八願）をたて、五劫という天文学的な長い時間、修行をつまれ、その誓いをことごとく完成させ、西方に極楽浄土を建設されて阿弥陀如来になられたと、『仏説大無量寿経』に説かれています。この四十八願のうち、第十八願をもっとも重要な願として、本願と呼んでいます。ここでは、阿弥陀如来のおこころが私に届いて、阿弥陀如来を疑いなく信心させていただくことで、美しいみほとけの国であるお浄土に生まれることができると説かれています。

六字名号

四七日

よなぬか

浄土真宗の宗祖・親鸞聖人は一一七三年、京都の日野でお生まれになり、九歳で出家得度。そして二〇年間、比叡山で学僧として修行され、下山して京都市内の六角堂で百日参籠され、夢のお告げで法然上人の門下生になられました。それもこれも、比叡山での修行生活に絶望され、すべての人びとが平等に救われる道を求めつづけてこられたからです。お念仏ひとつで救われるという、専修念仏の法然上人にであわれたのは、二十九歳のときでした。以来、越後や関東での生活、そして京都に戻られて九十歳で往生されるまで、ひたすら、お念仏の道を人びとに説きつづけられました。

親鸞聖人

関東時代の有名な伝説があります。ある吹雪の舞う夜、親鸞聖人が左衛門という下級武士に一夜の宿を乞うたところ、邪険に断られて、しかたなく門口で野宿されたといいます。ところがその夜、左衛門の夢枕に観音さまがあらわれて、いま門前に阿弥陀如来がお見えになっていると。おどろいて表に出た左衛門は、石を枕に雪の中でお念仏をとなえておられる親鸞聖人をみて前非を悔い、親鸞聖人の説くお念仏の道に入って名を道円と改めたというのです。親鸞聖人の伝道の旅のご苦労を偲ぶことができるエピソードです。

五七日

いつなぬか

浄土真宗のおつとめといえば、「帰命無量寿如来」ではじまる『正信偈』が、もっとも身近な存在でしょう。『正信偈』は、宗祖・親鸞聖人の主著『教行信証』の行巻の末尾にある七言百二十句の偈文（漢文のうた）です。また、法事での読経のあとにお坊さんが参詣者のほうに向きをかえて拝読されるのは『御文章』（御文）と呼ばれるもので、浄土真宗の中興の祖・蓮如上人が、お念仏をすすめるために全国の門徒にあてて書かれたお手紙をまとめたものです。

真宗の聖教

経典は『仏説無量寿経』（大経）、『仏説観無量寿経』（観経）、『仏説阿弥陀経』（小経）の「浄土三部経」です。これらは、お経ですからお釈迦さまのおことばをまとめたものです。阿弥陀如来の救いのたのもしさや、仏国土たるお浄土のすばらしさをたたえたお経です。

このほか、『讃仏偈』（大経下巻の四句二十偈の讃歌）や『重誓偈』（大経上巻の讃歌）といわれるみじかいお経もあります。

浄土真宗では、こうした「浄土三部経」をはじめとした経典と宗祖や蓮如上人の撰述、インド、中国、日本の七高僧の撰述を総称して「お聖教」または「聖典」と呼んでいます。

六七日

むなぬか

「戒名」と呼ばれることもありますが、浄土真宗では「法名」といいます。

戒名とは、数多くの厳しい戒律を守って仏門に入ったものに与えられる名前です。たとえば在家者の五戒――殺生しない・盗みをしない・不正な性行為をしない・嘘をつかない・お酒を飲まない――の五つの戒律です。これが出家者になると男性で二百五十戒、女性で三百四十八戒にものぼります。在家者の五戒すら満足に守ることのできない私たち凡夫は、ひたすら阿弥陀如来の救いを信じ、お念仏をとなえることでお浄土に救われ、仏さまと等しいさとりを得るのだと、阿弥陀如来の信心を説かれたのが親鸞聖人でした。ですから、浄土真宗では戒名といわず、法名と呼んでいます。法名に「釈」とあるのは、仏弟子の一人としてお釈迦さまのお仲間に加えていただくということをあらわしています。

法名と位牌

なお、浄土真宗では四十九日の間の白木の位牌のみ慣習上、用ることもありますが、その後、他宗のようにうるし塗りの位牌は用いません。亡き人の法名や俗名、死亡年月日などは過去帳に記載し、命日や年回にあたる日に、過去帳の故人の頁を開けてお仏壇に安置しています。

七七日

しじゅうくにち

「俱会一処」ということばが、『阿弥陀経』にあります。「ともに（俱）一つ処に会う」という意味です。「一処」とは、阿弥陀さまのお浄土です。考えてみれば「ともに一つ処に会う」ということは、私たちの身のまわりを見渡して考えますと、じつにたいへんなことです。たとえば、家族です。茶の間でといった空間的な集合はありますが、その集合は完全な「一つ」であるといえるでしょうか。いくら仲むつまじい夫婦であっても、いくら親思い、子思いの親子であっても、ほんとうの「一つ」にはなりきれないというのが、人間というものです。

お墓

お浄土は、この世のあらそいや憎しみをこえて「一つ」になるという理想世界です。「俱会一処」は、まさにこうした私たちの願いをあらわすことばです。亡き人やご先祖と私たちが、世の断絶やあらそいを超えた世界（お浄土）につながっていることの厳粛さをたしかめ合う場、それがお墓です。祖父母から親、親から子、子から孫へと永遠のいのちの中に生かされていることのありがたさを、しみじみと味わわせていただく場でもあります。

百カ日

ひゃっかにち

七、八百年もの古い歴史をもつ寺院もありますが、浄土真宗では室町末期から江戸初期、ないし中期にかけて建立されたお寺が大半ではないでしょうか。比較的新しいとはいえ、三、四百年あまりの歴史を刻んできました。こうした浄土真宗のお寺には、他宗にはみられない歴史的な特徴をもっています。それは、貴族や大名といった時の権力者からの寄進によって建立され、維持されてきたのではないということです。その顕著な例が、中部山岳地方の五箇山の道場です。熱心な念仏者の自宅の座敷を開放し、ここに名号をかけてご本尊とし、村の人びとと共に定期的に法要を営みました。そして念仏者のひろがりによって、手ぜまになったことから村人の手によって独立した建物(道場)が建立されるのです。これが、しだいに寺院化していきます。念仏者により、念仏者のために建立され、維持されてきた寺院、それが浄土真宗のお寺なのでした。

永代経

「永代経」とは、お念仏の道場として永代にわたってお経があげられていることをよろこばせていただく法要です。お寺では春秋の気候のいいときに、永代経法要がつとまります。機会をみつけて、お参りしたいものです。